

〔研究ノート〕

## 戦後初期における新宗教の台頭と大衆運動の教育・学習実践

平良 直

### はじめに

戦後の日本における新宗教の台頭と拡大は、これまで貧・病・争、および剥奪理論などで説明されてきた。また、新宗教入信者の属性や階層、入信動機、都市流入者への帰属集団・共同体の提供などをもとに説明されてきた。これらの研究は、さまざまな観点やデータをもとに得られた理解であり、社会学的な妥当な説明だといえるだろう。しかし、これまで研究された成果をもって当時の状況が余すところなく分析され、理解されたかという点、かならずしもそうはいえないだろう。視点を変更することであらたな理解がもたらされるということは十分ありえる。

戦後初期に台頭した新宗教教団における大衆教育（学習）的側面に着目し、再検討することによって、戦後新宗教の展開過程に新しい解釈が可能ではないかと筆者は考えている。新宗教の諸教団の運動を大衆教育、あるいは信徒の学習運動として見ていく視点である。このような視点を導入することによって、当時の時代状況のなかにあった大衆運動や左派革新的運動の大衆教化運動とパラレルに論じることができるのではないかと考えている。いまだテーマの着想段階であり、資料の分析途上であるゆえ、本稿は研究ノートの域をでることはできないが、いくつかの材料をもとにテーマの背景を説明してみたい。

現在新宗教の多くはしばしば指摘されるようにその教勢は低下しており、半世紀以上前の状況を分析することはそれほど意味があるのかという声が聞こえてくるが、かつての新宗教研究は「宗教」概念批判が盛んになる前になされたものであることを考えると、宗教、政治運動、教育といったそれぞれの領域で論じられていたことを脱領域化し、多角的に検討し直すことは現在の宗教・政治・教育に関する社会状況を理解するうえでも有効なことだと考える。